



研究紹介 長崎大学高度感染症研究センターの研究や研究者を紹介するコーナーです。

今回はバイオリスク管理部門の黒崎陽平准教授です。



小中学生の頃、好きなテレビ番組の一つが「世界ふしぎ発見」でした。当時土曜の夜10時に始まる番組を見ることは小学生にとってはハードルが高いものでしたが、よく親にせがんで見せてもらったことを覚えています。番組で紹介されるまだ見ぬ世界に純粋に好奇心をくすぐられ、現地に飛んで世界各地の様子を視聴者に伝える“ミステリーハンター”に、仕事であんな所に行けるなんて、と子供ながら淡い憧憬を抱いたものでした。

長崎大学に2011年2月に赴任し、今年で15年目を迎えます。雪国育ちの私にとって、“雪の積もらない冬”の長崎がとても新鮮に感じられました。今は地元に戻ると“雪の積もる冬”が逆に新鮮に感じられ、すっかり九州の人になったなと感じます。熱帯医学研究所助教として着任し、現副センター長 安田二郎先生の研究室で出血熱ウイルスの研究、具体的にはウイルスの遺伝子情報を基にした検査法の開発やウイルスがどのような進化の過程を辿ったかを探る研究などを行いました。2013年にギニア共和国でエボラウイルス病が発生し、その後西アフリカで大流行しました。その事態に対し、安田先生の指導の下、感染が疑われる患者さんの血液や体液中のウイルスの有無をベッドサイドやクリニックでも簡単に判別する検査法を開発しました。流行が収まっていなかったギニアに何度か赴き、検査法の実証試験や、独立行政法人国際協力機構 (JICA) 支援の専門家として現地ラボスタッフへの技術指導を行いました (写真1, 2)。ギニアは世界で最も貧しい国の一つとされています。日本とは全く異なる街並み、道路事情、衛生環境、そして行き交う人々の様子も間近に見ることができました。首都コナクリが主な訪問先でしたが、地方県の感染症検査ラボや、国境なき医師団や世界保健機関(WHO)が開設したエボラ患者の臨時治療施設などを訪問し、脆弱なインフラ設備の中で、それぞれのミッションをこなしている医療従事者、検査ラボスタッフのリアルな感染症対応の姿も目にしました(写真3)。テレビ番組では決して取り上げられることがなかった世界の姿をウイルス学の研究活動を通 (P4に続く)



(写真1)ギニアでの現地ラボスタッフへの技術指導



(写真2)JICA専門家派遣時(筆者右端)



(写真3)エボラ治療センター(2015年、コナクリ市)